

## 育児経験を経た保育者の保育実践意識の変容過程

— 保育者へのインタビューの TEM による質的分析 —

田中 文昭<sup>1</sup>・七木田 敦<sup>2</sup>

### Transformation Process of Kindergarten Teacher's Consciousness of Child Care Practice after Child Care Experience

A Qualitative Analysis of Interview with Kindergarten Teachers Using TEM

Fumiaki TANAKA<sup>1</sup>, Atsushi NANAKIDA<sup>2</sup>

**Abstract:** The purpose of this study was to clarify the pathways through which the perceptions and behaviours of child care practices are transformed when kindergarten teachers have experienced raising their own children. Semi-structured interviews were conducted with four kindergarten teachers who had children, and the data was analyzed using TEM. The results revealed three things: 1) The experience of raising their own children under the age of three enabled them to better understand parents by empathizing with their perspectives and the current condition of child-rearing; 2) Through contact with various people as parents, the kindergarten teachers became aware of the different ways of thinking and seeing as parents, and reaffirmed the importance of seeing each child as an individual. 3) Interaction with their younger colleagues prompted the kindergarten teachers who had experienced child-rearing at home to reflect on their child care practices. By doing so, they were able to understand that being close to the parents' feelings would lead to being close to the children's feelings.

**Key words:** parenting experience, TEM, behaviours of child care practices, view of child care, child care practice

#### 問題と目的

幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府・文部科学省・厚生労働省，2017）では、「子どもに対する学校としての教育及び児童福祉施設としての保育並びに保護者に対する子育ての支援について相互に有機的な連携が図れるようにすること」として示され、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説（内閣府・文部科学省・厚生労働省，2018）では、「保育教諭等が保護者との連携や交流を通して、子どもへの愛情や成長を喜ぶ気持ちを共感し合うことによ

て、保護者は子育てへの意欲や自信を膨らませることができる」と解説されている。このように保育者と保護者が互いに連携することで子どもの健やかな育ちや保護者の支援、保育者の育ちにつながるが、子どもの認識に関する両者の相違を示す先行研究が散見される。例えば、子育てに関する意識について、子どもの知識の習得や子どもの一日の生活の流れの捉え方に関して差異が認められると報告されている（斎藤・小池・植木，2003）。保育、子育ての問題を中心にした保育者と親の食い違いに関する研究では、子どもの見方について、親は自分の子どもを中心に今すぐ問題を解決してほしいと思っているが、保育者は客観的に成長のプロセスの中

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

2 広島大学大学院人間社会科学研究科

で子どもを捉え対応するところにズレが生じ、特に問題が解決できなかつた場合や解決に時間がかかった場合に、大きな不信感につながると指摘している（鈴木・堀江・若松・喜多村, 1999）。

一方で、人が親になることによって親としての発達の様相が明らかにされている。柏木・若松（1994）は親になることで、柔軟性、自己抑制、視野の広がり、自己の強さ、生き甲斐などの肯定的な側面としての人格的な発達とともに母親は育児による制約感という子どもの存在や育児への否定的な感情も持つ状態になることを明らかにしている。小野寺（2003）は妊娠期から親になって3年間にわたり、親になることによって自己概念がどのように変化するかを縦断的に調査し、母親になることで怒り・イライラが徐々に強くなり、自尊感情が低くなる傾向があり、社会に関わる自分が小さくなり、母親としての自分が大きくなることを明らかにしている。親になるということは人生における大きな価値観の変換点となり（菅・茂手木, 2011）親になることで自分の視点で捉えていた仕事への責任などの概念が他者の視点を含んだ概念へと変化する（加藤・永井, 2019）と言える。

子育て経験のある保育者と子育て経験のない保育者を比較した研究では、子育て経験のある保育者の方が保護者の理解が進んでいる（井森・山岸, 2009）と報告されている。また、上田・澤田・赤澤（2007）は「保育という仕事と子育ては相互に良い影響が強く、とくに、子育てが子ども理解や保護者理解といった保育者の専門的力量的の向上を助け、その力量が子育てに役立つ」としている。さらに出産・育児経験が子どもや保護者の理解という専門的力量的を向上させる一つの契機となり、専門職としての成長・発達を促す（中根, 2014）という指摘や親になることで保護者に共感的となり、保護者の対応が変化する（衛藤, 2015）という指摘もある。

上述した先行研究をまとめると、保育者と保護者との間には子どもの認識や子育てなどについてズレが存在するとしている一方で、親になることで人は変化し、子育て経験を経ることで子どもや保護者の理解が促されるということになる。ここから、保育者が育児経験を経ることによって、保育実践の捉え方や在り方は変容するものと推測されるが、どのようなことが契機となってそれらが変容するのか、そのプロセス

に焦点を当てた先行研究は見当たらず、どのような径路を経て保育者自身が変容するのかは明らかにされていない。以上より本研究では、保育者が育児経験を経ることで保育実践の捉え方や在り方がどのような径路をたどり変容するのかを明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 1. A園の概要

A園は大阪府の郊外にある幼保連携型認定こども園である。20XX年に私立幼稚園から幼保連携型認定こども園に移行した。その際に退職した教職員が多数復職した。幼保連携型認定こども園への移行前は産前産後休業及び育児休業を取得し職を継続した教職員は2名、結婚を機に一旦退職し数年後に復職した教職員は3名であり、結婚を機に退職する教職員が多かった。園規模は220名程度の園児数であり、大阪府の標準的な規模である。学校教員統計調査（文部科学省, 2018）によると、私立幼稚園の平均勤続年数は9.6年、私立の幼保連携型認定こども園は5.5年となっている。A園の20XX+1年の教員の勤続年数は6.9年であり、全国的に見ても標準的な私立の幼保連携型認定こども園であると思われる。A園を研究の対象とした理由は私立の幼保連携型認定こども園がこども園の多数を占める（内閣府, 2018）ため、その標準的なA園を研究対象とすることで本研究結果を実践の場で活用しやすいと考えたからである。

### 2. データの収集方法

20XX+1年9～10月にA園に勤務する母親である保育者4名（以下、研究協力者）を対象に半構造化インタビューを実施した。インタビュー時間は1回あたり70分程度であった。一人につきインタビューは4回実施した。インタビューでは研究協力者に承諾を得てICレコーダーで録音し、終了後に録音したものをテキストに書き起こし（以下、トランスクリプト）、インタビューデータを作成した。研究協力者の選定に当たっては、研究者が関心をもった現象を経験した人を招いて話を聞く手続きであるHSI（Historically Structured Inviting 歴史的構造化ご招待）（サトウ, 2015）により選定を行った。具体的にはA園に勤務する母親である保育者にインタビューを依頼し、協力の許可を得ることができた保育者を対象にインタビューを実施した。

### 3. 研究協力者の属性

研究協力者4名（以下、研究協力者A,B,C,D）の属性は下記の通りとなる。研究協力者Aは小学生と保育所に通う2歳児、2人を持つ30代の母親であり、保育者養成校を卒業後、A園に就職し、2度の産前産後休業及び育児休業を取得し、一度も退職することなく、保育者としてA園で働き続けている。研究協力者Bは中学生から小学生までの3人の子どもを持つ40代の母親であり、保育者養成校を卒業後、A園に就職し、2度の産前産後休業および育児休業を取得した。その後、一旦退職したが、20XX年にA園に復職した。研究協力者Cは小学生と幼稚園児の2人の子どもを持つ30代の母親であり、保育者養成校を卒業後、A園に就職し、5年間勤務した後、結婚を機にA園を退職した。その後、専業主婦を経験し、20XX+1年にA園に復職した。研究協力者Dは小学生から保育所に通う1歳児までの4人の子どもを持つ30代の母親であり、保育者養成校を卒業後、A園に就職し、5年間勤務した後、結婚を機に退職した。その後、専業主婦を経験し、20XX年+1年にA園に復職した。以上より、研究協力者4名はA園に継続勤務する経験をもつ者1名と継続勤務後に退職し復職した者1名、結婚を機にA園を退職し復職した経験をもつ2名で構成された多様な経歴を持つ集団となっている。

### 4. 等至点の設定

複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling 以下、TEM) は異なる初期条件や異なる道筋を通して同じ状態に至るまでのプロセスを非可逆的時間のなかで考え、記述する方法論である (安田, 2012)。TEMでは分岐点、等至点、及びその間の複線径路を描くことが分析の基本単位となっている (安田, 2015)。本研究では、等至点を「親・子の気持ちを理解した対応ができる」に設定して研究協力者にインタビューを行い、入職から等至点までの研究協力者4名の径路を明らかにしている。1・4・9の法則 (サトウ, 2015) によると、研究協力者4名の径路を明らかにすることで、子育て経験のある保育者の保育実践への捉え方と在り方に関する多様性と共通性を把握することができるものと思われる。

### 5. 分析手順

分析にあたっては、まず、研究協力者一人ひとりのTEM図を作成した。それぞれのTEM図を作成するにあたっては、初回のインタ

ビュー後に研究者が作成したTEM図をもとに、研究者と研究協力者の認識のずれを補正しながら両者が納得いくまでTEM図を書き直し作成した。両者が納得したTEM図はトランスビュー的飽和 (サトウ, 2015) に至ったとして解釈し、それぞれの分析を終了した。その後、統合TEM図を作成するにあたっては、時間軸に注意しながら研究協力者全員の類似ラベルを集め、ラベル名をそれらの類似ラベルに共通する語句に書き直し、時系列に並べた。次に実際には想定できる経験を考えて波線で示した。等至点に対して、現象に即した意味のある両極化した等至点も設定した。以上のような過程を経て作成された統合TEM図は、トランスビュー的飽和と両極化した等至点的飽和が達成されたと考えられ、研究の生態学的妥当性も高いと考えられる (サトウ, 2015)。以上の理由より本統合TEM図は飽和に至ったものとして分析を終了した。

### 6. 倫理的配慮

調査の実施にあたっては、A園より許可を得たうえで実施した。研究協力者には、それぞれに口頭で研究の趣旨・内容及び研究者の遵守事項を文書にそって詳しく説明し、協力の許可を書面で得た。

## 結果と考察

分析により明らかとなった「子育てを経験することによる保育者の保育実践の捉え方や在り方の変容プロセス」を図1に示す。図1に示す変容プロセスの全体を1期「独身時代の保育観とその言動」、2期「子育てを通しての気付き」、3期「新たな気付きによる保育観の変容」、4期「新たな気付きによる言動の変容」の4期に分け、等至点を「親・子の気持ちを理解した対応ができる」と定めた。なお、図1に示す結果を詳細に記述するにあたって、見出された各経験を〔 〕、必須通過点(OPP)、分岐点(BFP)、等至点(EFP)を【 】, 社会的ガイド(SG)、社会的方向付け(SD)は<>で示し、研究協力者の発言を引用する際は「 」で示した。

#### 1. 独身時代の保育観とその言動

研究協力者4名全員が「具体的な保育者の姿をイメージすることができない」ために、就職後は「【想像していた保育者像により働く】(OPP1:BFP1)しかない」と語っていた。しかし、保育者は養成校での学びを実現しようと、思い描いていた「理想の保育者に向かって努力する」

毎日を送っていた。ここから《養成校の学び》を(SG1)とした。保育現場では《園・保護者からの評価》(SD1)があり、試行錯誤をしながらも日々の保育をこなしていた。しかし研究協力者Bの語り「先が見えなくて、これでいいのかなと自信がなくて、でも必死に毎日を送っていた。」に見られるように、《自分の保育への自信のなさ》(SD1)や《保育に関する知識の不足》(SD1)、《時間的余裕のなさ》(SD1)などにより、個々の子どもに寄り添うことが大切であると認識しながらも、クラスのまとまりを優先する保育実践となっていた。これは研究協力者Aの語り「独身の時には、そのような思い(保護者や子どもの気持ちに寄り添うという思い)でいなければならないという考えは持っていたんですが、それがどういう状態であるかがわからなかった。」や、研究協力者Bの語り「保護者から見てクラスがまとまっているからとか、子どもが先生の話聞けるということが、保護者が良いと思ってくれると感じていた。」からもわかる。その結果、研究協力者Cの語り「独身時代は母親に共感するところが足りなかったという思いが今はある。」にみられるように、子どもや保護者に対して十分な配慮をすることができず、[親・子の表面的な気持ちの理解にとどまる]ことになっていた。これは若い保育者が中心である私立幼稚園の《職場の教職員構成》(SD1)が社会的方向付けになっていると考えられる。一方で[理想と現実とのギャップにさいなまれる]ことにより[保育者としての仕事を楽めない]保育者も一定数存在すると思われる。そのような保育者は最終的には[退職する]を選択すると考えられることから、この径路を点線で描いた。

このような状態で数年間、保育者として経験を積むと、一部は[退職する]を選択し家庭にはいる。森本・林・東村(2013)の保育者の退職に関する実態調査では、保育者の退職理由の多くが結婚による退職であった。本研究では研究協力者4名のうち研究協力者C,D 2名が[退職する]を選択していたが、[結婚する](BFP2)を選択後に、保育者を[継続する]ことを選択した研究協力者はA,Bの2名がいた。この2名は必須通過点である【出産する(親になる)】(OPP2)を経て[育児休暇を取る]ことを選択していた。一方で、[保育者としての仕事を楽めない]で[退職する]を選択した者の中には、[結婚しない]を選択し、[出産しない]者

と[結婚しない]が【出産する(親になる)】(OPP2)者や【結婚する】(BFP2)が[出産しない]者もいることが想定されるため、この径路を点線で描いた。

## 2. 子育てを通しての気づき

[退職する]を選択した研究協力者C,D 2名も[育児休暇を取る]を選択した研究協力者A,B 2名も【出産する(親になる)】(OPP2)ことで【親として子育てをする】(OPP3)経験を経ることから、これも必須通過点とした。幼稚園に勤める保育者は0~2歳の子どもに関わる経験がないため、研究協力者4名にとってはこの時の子育て経験が自らの保育実践の捉え方や在り方を揺さぶられるものとなっていた。専業主婦の方が仕事を持つ主婦よりも育児不安・負担感が高い(荒牧・無藤, 2008)と言われるが[退職する]ことを選択し、わが子の子育てを経験した研究協力者C,D 2名は、知り合いがない環境や専業主婦としての子育てなどにより[子育てに不安をもつ]状態になっていた。わが子の誕生から数年は、親として何もかもが初めての経験であったことが、子育てに対する戸惑いや大変さを生じさせる原因となっていたが、一方で子どもを育てるという喜びも同時に感じていた。研究協力者全員がこのような感情を持っていたためにこの経験を必須通過点とし、【子育ての大変さ・喜び・重みを知る】(OPP4)とした。研究協力者Bの語り「親になって3歳までの親としてのわが子への思いを知ることになりました。独身の時はそのしんどさとか大変さというのを知らなくて。」や研究協力者Dの語り「0歳から2歳までの子どもの子育てをすることで、親がどんな思いでわが子を育てるかっていうのを知ることになりました。そこを知るようになって親の気持ちにも寄り添えるきっかけになったという感じです。」がこの経験を物語っている。その後、研究協力者Cは子どもが歩き始めたことにより、子どもと2人だけの環境を変えようと思い、定期的に[子育て支援センターに通う]ようになった。そこでは、[親としての観点から保育を見る]経験をしていた。子育て支援センターには多くのベテラン保育士が在籍し、[ベテラン保育士からのアドバイス]によって、[自分の独身時代を振り返る]ことでその違いを感じていた。仕事を継続させるために研究協力者A,B 2名は[保育所に入所する]選択をし[職場に復帰する]ことになった。保育所は幼稚園と異なり、複数担任であること

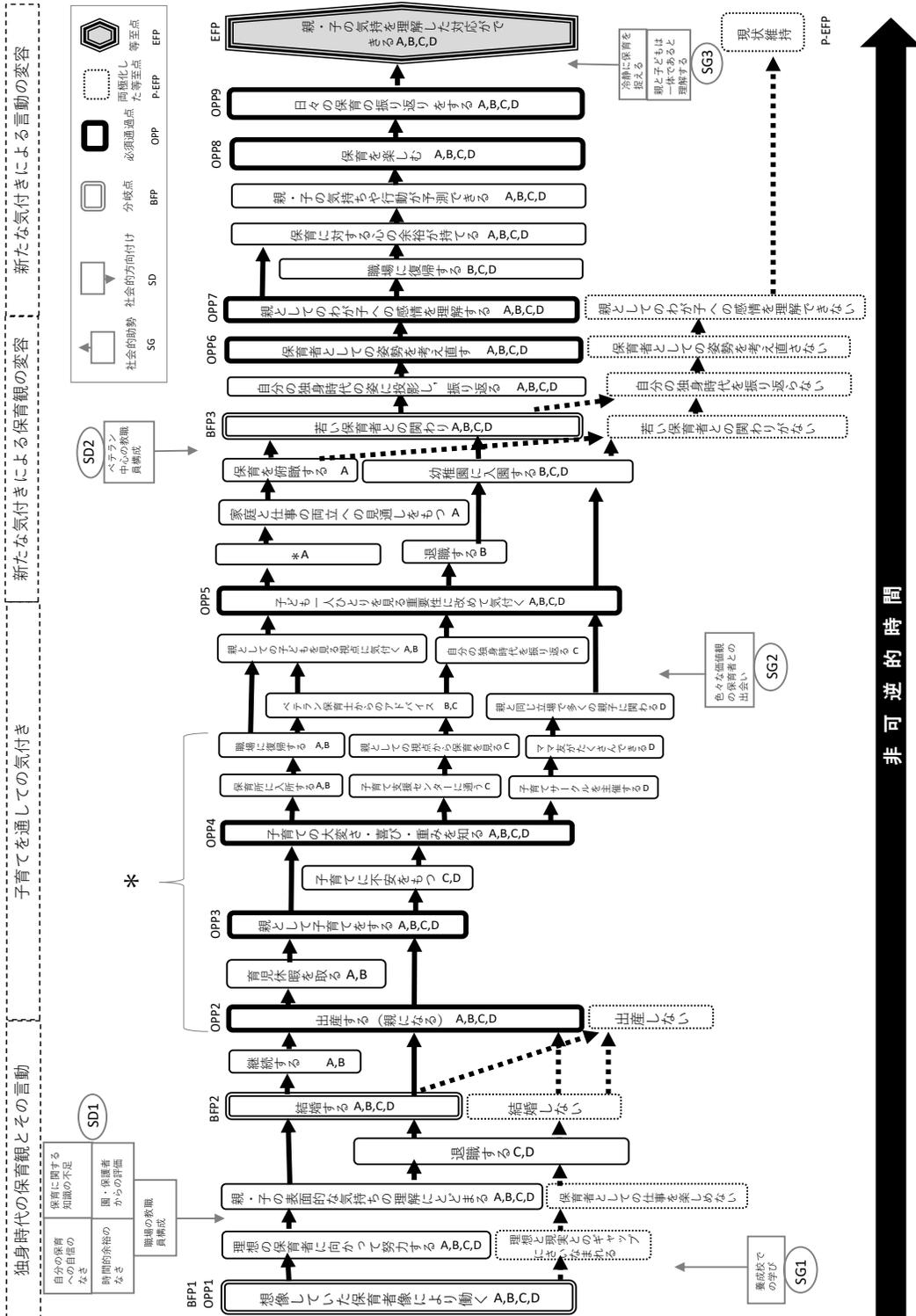


図1 子育て経験を経ることによる保育者の保育実践の捉え方ややり方の変容プロセス

が多い。そのような構造的な理由から研究協力者Bは《色々な価値観の保育者との出会い》(SG2)を持つようになった。研究協力者Bの語り「年配の保育者からの助言にすくわれたことや気付かされたことがある」や研究協力者Cの語り「子育てをしながら保育者をしている人の言葉で安心することが多い」にあるように、子育て経験のある保育者からの助言やアドバイスは親にとって自分を理解してくれる人からのアドバイスとして認識され、その存在感や言葉の重みが親に影響を与えていると思われる。研究協力者Dは近所で知り合った主婦と「子育てサークルを主催する」ことになり、「ママ友がたくさんできる」ことになった。子育てサークルでは「親と同じ立場で多くの親子に関わる」経験をすることで、色々な親の価値観やさまざまなタイプの子どもに触れることができ、研究協力者Dに大きな影響を与えていた。研究協力者全員は、それぞれ保育者としてではなく親として保育者や他の保護者と接する経験を経ることで、自分とは異なる価値観や見方に触れたことにより、今までの保育観を否定するのではないが、自身の保育観が少しずつ変化していることを感じていた。独身時代にはクラス全体をまとめることを最優先に保育実践を行っていたが、研究協力者Cの語り「子どもの心に寄り添うっていうのは独身時代には小さかったのかもしれない。でも今はそこが大切だと思うようになりました。一人ひとりの子どもに寄り添っていくことが大切だという思いが膨らんできたんです。でも前の思い(クラス全体をみることが大切)がなくなったわけではないんです。」にあるように、【子ども一人ひとりを見る重要性に改めて気付く】(OPP5)ことになっていた。

### 3. 新たな気付きによる保育観の変容

その後、研究協力者Aは2度目の出産を経て、育児休業を再び取得していた。研究協力者Aは「1度目と2度目の出産から育休までの経験には大きな違いはなかったです。」と語っていたことから、出産から職場に復帰するまでの重複する経験は同じ径路と捉え、これを図1には〔\*〕で表した。しかし、これに続く研究協力者Aの語りの中に「2度目の産休・育休明けに感じたことは、仕事と家庭との両立の見通しが持てたことは大きかったです。」が見られたことから2度目の復職後の次の経験を「家庭と仕事の両立への見通しをもつ」とした。復職後、

研究協力者Aは役職が付き、クラスから外れることで「保育を俯瞰する」ことになった。そこで研究協力者Aは【若い保育者との関わり】(BFP3)が役割として必須となった。研究協力者Bは体調不良により「退職する」こととなった。研究協力者B,C,Dの子どもは「幼稚園に入園する」ことになり、第1子が「幼稚園に入園する」ことで大きな転機が訪れていた。入園した幼稚園はいずれも私立幼稚園であり、【若い保育者との関わり】(BFP3)が日常的に存在する環境であった。研究協力者4名の径路は異なるが、【若い保育者との関わり】(BFP3)によって、若い保育者の姿を「自分の独身時代の姿に投影し、振り返る」ことになり、その結果、【保育者としての姿勢を考え直す】(OPP6)ことにつながっていた。しかし、《ベテラン中心の教職員構成》(SD2)の場合は【若い保育者との関わり】(BFP3)が少なくなるため社会的方向付けとした。研究協力者Cの語りの中に「担任の若い先生と接していると、もうちょっと親の気持ちを理解してよって思うところもあるんです。」があるが、ここで自分自身は保育者ではあるが親としての感情が心の中に同居していることに気づくことになっていた。これは研究協力者Bの語り「今まで(独身時代)は想像でしかなかったのが、自分が親になることによって、それ(親のわが子への気持ち)をリアルに感じる。」にあるように、【保育者としての姿勢を考え直す】(OPP6)ことにより、【親としてのわが子への感情を理解する】(OPP7)につながっていると考えられる。一方で、【若い保育者との関わりがない】場合には、「自分の独身時代を振り返らない」ため「保育者としての姿勢を考え直さない」という径路が考えられることから、これを点線で描いた。

### 4. 新たな気付きによる言動の変容

研究協力者Aは2度の育児休業後も継続してA園に勤務していたが、研究協力者B,C,Dは一旦退職後に再び、A園の「職場に復帰する」ことになった。研究協力者全員が、わが子の子育て経験により保育に見通しが持て(上田・澤田・赤澤, 2007),「今(保育している今)が楽しい」と語った。研究協力者全員が「保育に対する心の余裕が持てる」と感じることで「親子の気持ちや行動が予測できる」ようになり、それが【保育を楽しむ】(OPP8)ことにつながっていると考えられる。研究協力者Dの語り「今はすごく保育をするのが楽しいので、(中略)

冷静に園児を見ることができるよう。だから毎日の保育がどうだったかを考えられるんです。]に見られるように、【保育を楽しむ】(OPP8)ことで【日々の保育の振り返りをする】(OPP9)ことになっていた。また「冷静に保育を捉える」(SG3)や「親と子どもは一体であると理解する」(SG3)ことが助勢となり、等至点である【親・子の気持ちを理解した対応ができる】(EFP)実践になっていた。親・子の気持ちを理解した対応とは、親の気持ちを踏まえて親へ伝えることや子どもの言動に対してその背景や理由を考え、子どもの思いをくみ取った応答を示す。研究協力者Aの語り「門で保護者とバイバイができずに泣いている子どもがいたら、昔(独身の時)はどうしたら親から子どもを引き離せるか、それだけを考えていたのですが、今は引き離された時の保護者の気持ちであったり、子どもの気持ちであったり考えるので、自然と保護者にも一声がでてきます。」に見られるような事例が、A,B,C,Dすべての研究協力者から語られた。一方で「保育者としての姿勢を考え直さない」保育者は「親としてのわが子への感情を理解できない」と思われることから、そのような径路を等至点の対極に位置するものとして「現状維持」(P-EFP)と名付け、この径路を点線で描いた。

### 総合考察

本研究では、保育者4名の語りからわが子の子育て経験を経ることで保育者の保育実践の捉え方や在り方がどのように変容するのかを検討し、その径路の描出を行った。その結果、本研究によって明らかになった知見を総合考察としてまとめると以下の3点となる。

#### 1. 3歳未満のわが子を育てる経験

保育者が3歳未満のわが子を親として育てる経験により、親としての子育ての大変さや喜び、重みを知ることになった。親になることで自分の視点で捉えていた仕事への責任などの概念が他者の視点を含んだ概念へと変化し(加藤・永井, 2019)、娘が親になる過程で母親と同じ体験をすることで母親に対して親しみや感謝などの肯定的な感情が生まれることが明らかになっている(富岡・高橋, 2005)。子育て経験のない保育者は、子どもを持つことで母親がイライラした感情をもつ(小野寺, 2003)など、子育てにより生じる母親の負の感情に気付きにくい。徳田(2002)と佐々木・植田・鈴木・前田・

片山(2004)は親になることで獲得されるものと共に、自分の時間や行動の自由などの子育てによる喪失の側面があることを指摘している。以上より、3歳未満の時期に親としてわが子の子育てを経験したことにより、保護者の視点や子育ての現状を知り、それが保護者の理解につながったものと考えられる。

#### 2. 親としていろいろな人と接する機会

家庭での子育てから保育所を含む地域の子育て集団に参加することによって、子育て中の保育者には様々な出会いがあり、保育者としてではなく、親として他の保育者や保護者と接することになった。保育者と保護者には保育に対する思いや見方が異なる(西谷・石野, 2009)ことが明らかにされているが、保育者として接していたならば気づかなかったことが、親として接することで親であるがゆえの考え方や見方に気付き、独身の時には保育の慌ただしさや時間的な余裕のなさにより後回しになっていた一人ひとりの子どもを見る大切さを再認識したのではないかと推察される。

#### 3. 若い保育者との関わり

上述した1,2に気付いたことで、保育者中心の思考や言動が他者である親子の視点を含んだものへと変容し、子育て経験前には親と子を別々に捉えていたのが、親子を一体として捉えるようになったと推察される。子育て経験のある保育者が若い保育者との関わりにより、目の前の若い保育者の姿に過去の自分の姿を投影し振り返っていた。自分自身の過去を若い保育者に重ね合わせることで、子育て経験前には気付かなかった親の思いを受け止める重要性を認識し、自分自身の保育者としての姿勢を考え直すことになった。その結果、保護者の気持ちに寄り添うことが子どもに寄り添うことにつながると理解し、親・子の気持ちを理解した対応ができるようになったと考えられる。

若い保育者との関わりが、子育て経験のある保育者の振り返りを促すことが明らかになったが、一方で先輩とのなげない日常的なコミュニケーションが新任保育者の探究的省察(注)を促す要素にもなっている(谷川, 2018)。また、木曾(2018)は先輩保育者との相談可能な雰囲気や先輩保育者の受容などが新人保育者の育成に寄与するだけではなく、早期離職の防止にも効果を発揮するとしている。以上より園組織として保育の質を高めていくことを考えた場合、子育て経験のある保育者だけで構成されるベテ

ランばかりの組織が良いのではなく、若手とベテランとでバランスよく構成されている園の組織構成が重要であると考えられる。そして若手保育者と子育て経験のある保育者が互いを尊重し合い良好なコミュニケーションのもと、協働的に保育実践を行える保育者集団であることが園として最良の状態であると言える。

## 課題と限界

本研究の研究協力者は、以前に働いていた園に復職した保育者と同じ園に継続勤務している保育者で構成された保育者集団であった。保育者のアイデンティティ形成は実践コミュニティの影響を強く受ける (Wenger, 1999)。特に私立園の場合、園文化ともいえる各園特有の価値観が存在し、保育者の経験の質と変容のプロセスは勤務する幼稚園の条件によって規定される (吉村, 2000) という指摘がある。以上より本研究の結果は A 園の風土や考え方に影響を受けた可能性があるため、他園からの転職者が研究協力者に含まれていた場合、異なった結果となった可能性は否定できない。また、本研究は幼稚園勤務経験のみの保育者集団を対象としたため、保育所等で乳児を持った経験のある保育者であるならば、本研究と異なった結果となった可能性がある。今後は、さまざまな属性の保育者集団についても研究を重ね、知見を積み上げていき、実践に役立つものにしていきたい。(注) 谷川 (2018) によれば、デューイの *reflective thinking* の概念であり、保育する中ですぐには解決の仕方がわからない危機に直面して困難や葛藤を抱えるが、それらが自らの保育実践を吟味、検証していく契機となり、自分なりにその状況や状態に応じて新しい実践を生み出していくことを意味する。

## 引用文献

荒牧美佐子・無藤隆 (2008) 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に。発達心理学研究 19(2), 87-97.

衛藤真規 (2015) 保護者との関係に関する保育者の語りの分析—経験年数による保護者との関係の捉え方の違いに着目して—。保育学研究, 53(2), 194-205.

井森澄江・山岸明子 (2009) 青年期から成人期にかけての母親認知の縦断的变化—母親になること—。東京家政大学研究紀要, 49(1),

125-132.

柏木恵子・若松素子 (1994) 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み。発達心理学研究, 5(1), 72-83.

加藤孝士・永井知子 (2019) 親になることによる生活意識の変化—因子得点・構造, 自由記述からみる量的・質的な変化に注目して—。こども学研究(1), 85-98.

菅由美子・茂手木明美 (2011) 乳児期の子どもをもつ母親の親役割獲得過程と意識の変化—育児を経験することによる親性の構築—。幼児健康教育研究, 17(1), 55-62.

木曾陽子 (2018) 保育者の早期離職に関する研究の動向—早期離職の実態, 要因, 防止策に着目して—。社会問題研究 (67), 11-22.

森本美佐・林悠子・東村知子 (2013) 新人保育者の早期離職に関する実態調査。奈良文化女子短期大学紀要(44), 101-109.

文部科学省 (2018) 学校教員統計調査—結果の概要。8.

内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領。

内閣府 (2018) 認定こども園に関する状況について (平成30年4月1日現在)。1-2.

内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説。

中根真 (2014) 保育所保育士のワーク・ライフ・バランス (Work-Life Balance) の実態と課題—両立の「難しさ」に焦点をあてて—。保育学研究, 52(1), 116-128.

西谷綾子・石野秀明 (2009) 幼児劇に対する評価視点に関する研究：保育者と保護者の意識の違いに着目して。日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 574.

小野寺敦子 (2003) 親になることによる自己概念の変化。発達心理学研究, 14(2), 180-190.

齋藤裕・小池由佳・植木信一 (2003) 保育者と保護者の子育てに関する意識の差異 (1) —保育者から見た保護者像を中心に—。日本保育学会大会発表論文集 (56), 862-863.

佐々木くみ子・植田彩・鈴木康江・前田隆子・片山理恵 (2004) 親となる意識の構造とその影響要因に関する調査研究。米子医学雑誌 55(2), 142-150.

サトウタツヤ (2015) TEA というアプローチ  
安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編)。TEA 理論編 複線径路等至性ア

- プローチの基礎を学ぶ. 新曜社. 5.
- サトウタツヤ (2015) TEM 的飽和. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編). TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ, 新曜社. 24-28.
- 鈴木佐喜子・堀江まゆみ・若松美恵子・喜多村純子 (1999) 保育者と親の食い違いに関する研究—保育, 子育ての問題を中心に—. 保育学研究. 37(2), 200-208.
- 谷川夏実 (2018) 保育者の危機と専門的成長—幼稚園教員の初期キャリアに関する質的研究—. 学文社. 146-148.
- 徳田治子 (2002) 母親になることによる獲得と喪失—生涯発達の視点から—. 家庭教育研究所紀要, 24, 110-120.
- 富岡麻由子・高橋道子 (2005) 親への移行期にある娘のとらえる母親との関係性: 再構築の過程とその要因. 東京学芸大学紀要1部門. 教育科学. 56, 137-148.
- 上田淑子・澤田忠幸・赤澤淳子 (2007) 子育てをする保育者の仕事と家庭の関係—とくに子育てが保育力量に及ぼす影響について—. 乳幼児教育学研究. 16, 15-22.

Wenger, E. (1999) *Communities of Practice: Learning Meaning and Identity*. Cambridge University Press. 145.

- 安田裕子 (2012) TEM 入門編—丁寧に, そして気楽に (楽に雑にはダメ) 安田裕子・サトウタツヤ (編著). TEM でわかる人生の径路 質的研究の新展開. 誠信書房. 1-3.
- 安田裕子 (2015) TEM の基本と展開. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編). TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ. 新曜社. 35.
- 吉村香 (2000) 実践構想に顕れる保育者の価値観とその規定要因に関する試論. 東京家政大学研究紀要. 40(1), 145-157.

### 謝 辞

本研究にご協力いただきました認定こども園 A 園の研究協力者 4 名の先生方にお礼申し上げます。

### 付 記

本稿は2020年5月の日本保育学会第73回大会において, その一部を発表した。